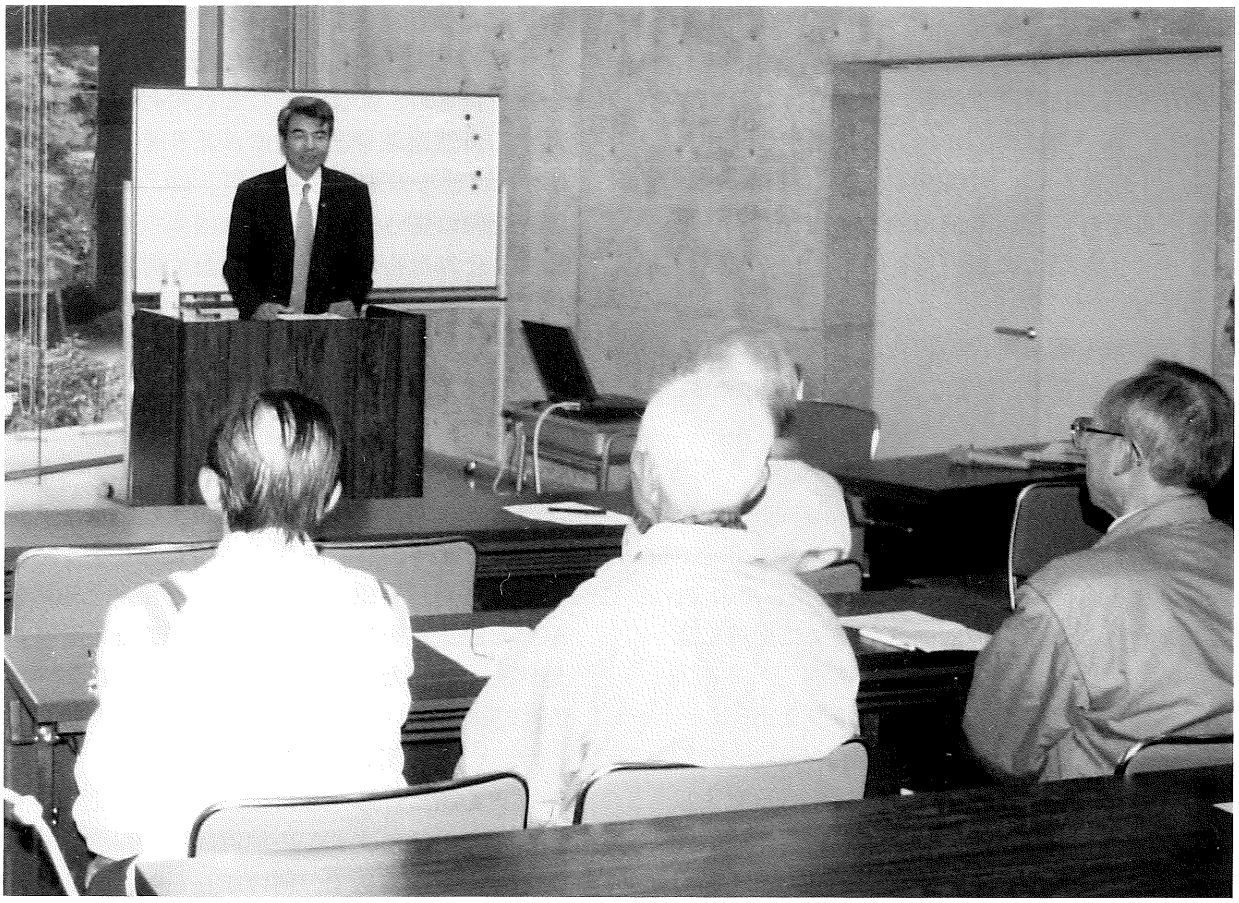
甲斐の金山から　平成16年1月15日　第27号

博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡／湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報



新年明けましておめでとうございます

皆々様が健やかに新年を迎えられたこととお喜び申し上げます。

御来館くださるお客様、そして各界関係者の多くの皆様のお力添えで順調に有料入館者数を伸ばし、間もなく12万人を迎えようとしております。また、開館以来継続して開催されている公開講座には毎回著名な先生方による講演をいただいておりますが、昨年末までに33回を数えました。これは日本における金山史研究の拠点でありたいという私達の願いを実践しているものです。（写真：九州大学名誉教授・井澤英二先生の講演の様子。関連記事4・6ページ）

2004年も学術・観光両面の一層の充実を図り、さらなる飛躍の年にすべく、職員一同これまで以上に努力を惜しまぬ所存ですので、本年も変わらぬ御指導・御協力をお願い申し上げます。

新「身延町」の活性化へ向けて

3町の魅力ある自然遺産・文化（歴史）遺産を見直そう

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長　谷　口　一　夫

明けましておめでとうございます。今年は町村合併という大きな「夢」の実現があります。この絶好の機会を活かし、光り輝やく新「身延町」をつくりませんか。３町民の意識の持ち方一つで実現します。

合併は９月13日です

今年９月13日に、下部町、中富町、身延町が合併し、新「身延町」がいよいよ誕生します。

１（下部町）＋１（中富町）＋１（身延町）＝１新（身延町）という消極的な合併でなく、１＋１＋１＝無限大の新（身延町）を目指したいものです。

それには３町の町民の一人ひとりが、前向きに新町の発展を思い行動することで実現します。漠然と何も考えずにいると何も起きません。

合併によって大きく飛躍させたいという意識の高まりがあれば数倍もの相乗効果に期待でき、魅力ある「町づくり」が可能でしょう。

ここまで合併の手続きが進んできましたので、これからは３町住民の前向きな姿勢に期待します。

合併効果が即現れた南アルプス市

６か町村が合併して誕生した南アルプス市は、今、勢いを感じます。個人住宅建設も目覚ましく数字を急激に伸ばしています。開発に伴う埋蔵文化財調査が合併前の1.6倍という数字にも現われています。これは人口の定着と増加を意味するものです。

合併前の意識の高まりが大事

また、北杜市、甲斐市、笛吹市の誕生が決まっており、無限の可能性を感じます。新「身延町」も同じです。無限の可能性を感じます。既存の甲府、韮埼、山梨、塩山、大月、都留、富士吉田市もうかうかしていられないでしょう。

新市、新町が無限の可能性を感じさせるには、一つに住民の意識の高まりが大事です。

ややもすると「どうせ直ぐ合併するんだから」とか「合併後に考えればいいじゃん」ということで、合併までの大事な期間を眠ってしまうことがあるかも知れません。しかし、今こそが未来へ向けての目標や意識を高める大事な時期だと思います。大いに家庭内や地域で語りあって戴きたいと思います。

新「身延町」』の魅力を探そう

新「身延町」には、それぞれ固有の或いは共通する自然遺産や歴史遺産があります。産業もあります。いずれ新「身延町」は、観光立町で観光を軸に生きていかなければならないと思います。それなら地域がもつ資源や財産をどう活用するかに関わってきます。また活かされずに眠っている地域の新たな素材を掘り起こしていく必要もあります。これこそ３町の住民の知恵次第です。

３町の皆様は今こそ自分が住む地域の「自然や歴史」を再認識し、地域に誇りを感じて欲しいと思います。

互いに誇りを感じる３町が、各々の「地域の自然と歴史」を理解し、尊重することで新「身延町」は、新たな発展への糸口を見い出すことができます。

３町は「河内領」で共通

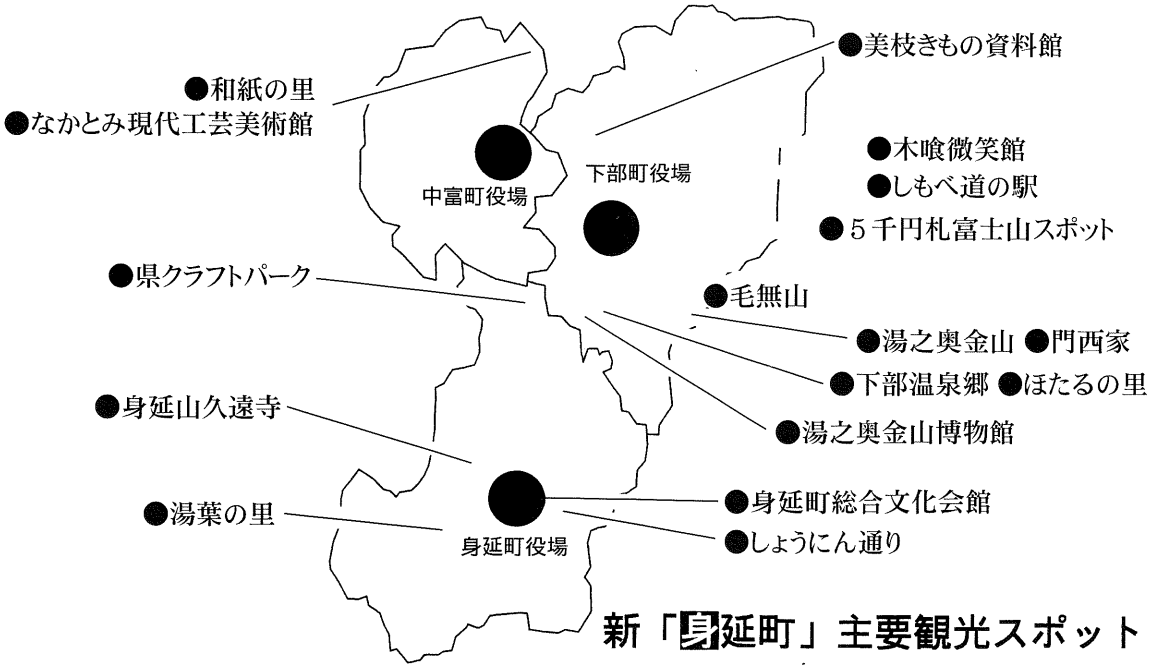
歴史を紐とけば、３町は同じ土台の上にいることが分かります。この地域は中世以来、穴山氏が領有した地域で「河内領」と呼ばれたところです。その範囲は六郷、下部、中富、身延、早川、南部、富沢と鰍沢の一部が含まれます。

古文書では河内領常葉村、河内領茅小屋村と言うような河内領〇〇村といった表記が見られます。

江戸時代、富士川左岸の八代郡分には59村6,716石、右岸の巨摩郡分には63村9,163石があり、焼き畑、紙漉き、産金、屋根ふき、大工、それに山稼ぎや川稼ぎで生計を立てていたという地域の歴史があります。

３町の歴史を紐とくと

現在の下部温泉は千年以上（10世紀以上）



新「身延町」主要観光スポット

の歴史をもつ湯治場です。また日蓮聖人は晩年の1274年（文永11）に、それは今から724年前の鎌倉時代ですが、甲斐南部の領主波木井実長の招きで身延山久遠寺を早創しました。この時期に目蓮が残した遺文に「下部の湯治場」の記述が見られます。下部温泉の歴史の深さを知ることができます。

房総からの女性の信者が下部の湯治場へ来て、日蓮聖人を訪ねて来たわけですから「下部の湯治場」も「身延山久遠寺」も、その時代既に各地に知れ渡っていたと見られます。

200年間掘られた湯之奥３金山

湯之奥金山は古文書では、1534年（天文３）の今川寿桂尼の文書（富士金山へ上げる荷物の許可）から人の動きが確認できます。さらに考古学による発掘資料からは、それより遡る資料がありますから、もう少し1500年に近づくと考えられます。そして終わりは1700年の直前までの約200年間に及びます。

湯之奥金山の特徴は、砂金に代わる金鉱石から金を採掘した日本における初源的な山金山として評価されています。大変重要な金山で黒川金山と共に国指定史跡に指定されています。身延町下山から見た蝙蝠山（こうもりやま）こそが湯之奥金山なのです。

戦国時代に始まった西島和紙

中富町西島に残る和紙の歴史は戦国時代に遡ります。1500年代の中頃から、武田家、穴山家文書が急速に増えますが、その背景には①和紙の生産地があったこと、②それまでの花押に代わり朱印などに見られる印判が活用され始めたこと、などが挙げられます。やはり河内領における和紙の生産と手彫り印鑑の存在があればこそだと言えます。

「東国の金山遺跡と黄金文化」で世界遺産めざす

現在、湯之奥金山遺跡（甲斐金山）は世界遺産登録へ向けた民間レベルでの運動を展開しています。既に金山博物館のエントランスに置かれた署名簿には3,300人余りの皆様からの記帳を戴いております。他県では新潟の佐渡金山が岩手では陸奥金山遺跡（鹿折金山など）と平泉中尊寺金色堂（世界遺産暫定登録済）が登録運動中です。私は、それらを一括りした『東国の金山遺跡と黄金文化』として「奈良時代に日本で最初の産金地である宮城県涌谷の「黄金山金山遺跡」（国指定史跡）、岩手県の陸奥金山遺跡、中尊寺金色堂（暫定登録済）、日本最初の山金山で甲州金をもたらした甲斐金山（黒川・中山）遺跡（国指定史跡）、江戸期最大の金山である佐渡・相川金山（国指定史跡）」で括った世界遺産登録へ向けた運動の提言を各地に発信しています。これが実現できれば、世界に直結した観光地、新「身延町」が、日蓮宗総本山である久遠寺と共に脚光を浴びることになります。他の観光スポットを含め、新「身延町」の夢はますます拡大していくばかりです。

活　動　報　告

平成15年度公開講座

昨年の10月から平成15年度公開講座が始まっています。今年度も全５回で各界の著名な先生方をお招きし、今年のテーマ『甲斐金山と鉱床学～山金・砂金・芝金を見極めた金山衆の世界～』のテーマのもと、3回が終了いたしました。

第１回目は10月18日。「山金鉱床(鉱石と金鉱石)の一考察」という演題で、金属鉱山研究会所属、原田　明先生に講演をいただきました。

鉱石を専門とされる原田先生は、当時の鉱山作業に携わっていた人々は何を指標に鉱床や鉱石を見極めたのか、またそれに伴ってどんなタイプの鉱床を採掘していたのかなどを、自身の調査や経験などを踏まえながらお話しされました。この回の聴講者には、先生から金鉱石若しくは銀鉱石のサンプルが配付され、聴講に来た人たちは思わぬ鉱石のお土産があり、大変嬉しそうでした。

第２回目、11月15日は九州大学名誉教授・井澤英二先生でした。井澤先生には過去２回、当館の公開講座で御講演いただいておりますが、(金山史研究第１集、第３集収録)、複雑に思える地質や鉱床の話を誰にも分かりやすくお話ししてくだされ聴講者からも人気の先生です。今回の講演は「戦国期金山衆の自然理解～日本の鉱床地質学の源流～」という演題でお話ししていただきました。また先生のお話には一般聴講生のほかに各界の先生方も聴講に来ていました。

先生は、中世鉱山書から当時のヨーロッパにおける鉱山技術がどのようなものだったかを説明した上で、そのほぼ同時代に活躍した金山衆たちの鉱山に対する技術・知識が、ひいては日本の鉱山技術がどの程度のものだったのかをお話しされました。

第３回目は、12月13日に「長尾（甲武信）金山雑考～鉱山と植物～」と題し、雲南・チベット民俗学会の由井　格先生にお話をいただきました。長野県の長尾金山を主体に話が展開する中で、一般的に鉱夫の生活に対するイメージが暗いものがありがちだが実は逆で、山に暮らす者の智恵として木の実や果物など、食にはある種のこだわりがあったのではないかなど、長年研究調査を積み重ね実地に学んだお話をされました。

なお、本年１月17日には第４回の「金鶏金山の歴史と地質鉱床」と題し三井金属鉱業総合研究所資源研究室室長五味篤先生の講演がありますので多くの皆様の御出席をお願いいたします。

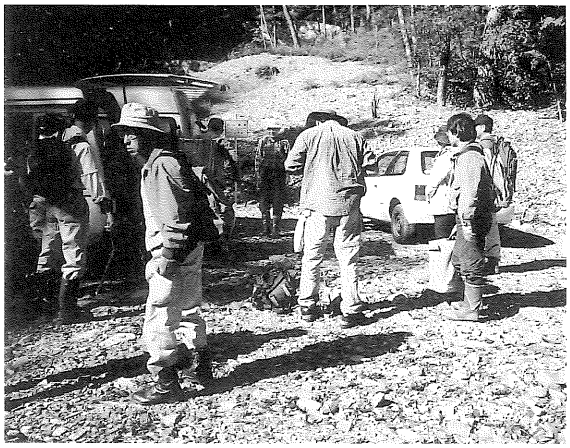
由井格先生の講演の様子

川尻金山遺跡見学会　　10月19日(日)

すっきりと晴れ渡った秋空が広がるこの日、秋の遺跡見学会を開催いたしました。これまでの遺跡見学会は湯之奥３金山いずれかを選定していましたが、今回は本栖湖近くにある川尻金山です。

下部町内には中山・内山・茅小屋の湯之奥３金山遺跡のほかに、川尻、常葉、栃代の３金山、合わせて６つの金山遺跡があります。いずれも戦国時代に稼業していたと伝えられる金山ですが、湯之奥中山金山遺跡（国指定史跡）以外は総合調査が行われていないため、まだ詳しい実態は解明されていません。やがて将来、すべての金山の総合調査が必要になりますが、予備的な遺跡の状況把握に今回の見学会は大いに役立ちました。

特に湯之奥３金山と異なり、川尻、常葉、栃代の３金山は近代に入ってからも稼業しており、昭和前期頃まで、鉱山作業に従事していたとい



現地へ向けて出発の準備をする参加者たち

う方々が何人か町内に在住しており、その方々がお元気で現地を案内していただける間に現地調査をしたいということで、今回の川尻金山見学会が実施されました。この見学会を催すにあたって下見の現地案内を、当時の関係者である赤池宗信氏（釜額在住）に御協力いただきました。氏から見て「現場はかつて自分が働いていた時からあまりにも様変わりし分からなくなってしまった部分が多い」と口にしていました。そんな中でかつて操業していた当時の作業の様子や経験したことなども合わせた現地資料を参考にし、現地へと向かいました。今回の見学会は県内外から15人の参加者が集まり有意義に開催されました。

博物館から本栖湖まで車で移動し、現地入口からは沢や堰堤を越え、途中の坑道や鉱石を観察しながら急な沢を登っていきましたが、前日の公開講座で講師を務めた原田先生も見学会に参加し、鉱石や鉱床の見方など現物を指しながら分かりやすく説明をしてくれました。また、現地には古い時代のテラスや遺構が残されており発掘調査をすれば詳しい情報が得られるだろうという感じを受けました。

現場を見学した後、午後は麓金山・金山衆の末裔竹川家を訪問し、竹川昭司さんに御案内いただきました。まず参加者の口から漏れたのは「すごい」という言葉。歴史の重さを感じさせるあの立派なたたずまいの門に、参加者の誰もが驚いた様子でした。竹川氏は急な訪問にも関わらず、麓側からの毛無山登山道入口にある精錬場跡（この遺構は昭和初期のものですが）の説明をしてくれ、参加者は熱心に耳を傾けていました。

竹川氏に御礼を言い、猪之頭林道を通って少し早い紅葉を車窓に眺めながら博物館に到着したのがちょうど午後４時ごろ。けが人もなく無事に見学会を終えることが出来ました。

町内６金山遺跡見学会はスタートしたばかり。次回の見学会は常葉、栃代金山のいずれかを選定し、開催したいと思います。

ちなみに今回、戦国期の遺物は発見されませんでしたが、土にうずもれていた石積みの遺構や、昭和期の閉山間際に鉱山夫達が使用していたと思われる焼酎の甕や茶碗なども多く発見されました。これらの資料は博物館で公開したいと考えています。

黄金の夢の跡“祠”

物　産　ま　つ　り　　11月８日(土)

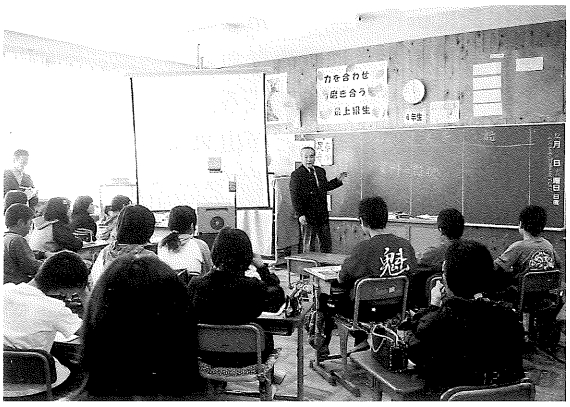
この日はしもべ道の駅（農村文化公園）で、下部物産まつりが開催されました。敷地内に所狭しと並んだ地元の野菜や名産を道すがら買い求めるお客様で盛況でした。そんな中、金山博物館からは出張体験室を出店し通りかかった子ども達が砂金採り体験をしていきました。中には博物館で体験したことがあるという子もいて、「前より取れた」と嬉しそうでした。

当日は、多くの町村で同様な物産祭りが開催され、隣町、身延町の富士川ふるさと工芸館（クラフトパーク）でも出張体験室を出店しましたが、こちらも気軽に砂金採りを楽しむ子ども達で賑わいを見せていました。

久那土小学校出前博物館　12月２日㈫

久那土小学校６年生を対象にした、課外授業として「出前博物館」が午前中、約１時間半行われました。この事業は、学校側からの依頼によって博物館で対応しているものです。

主旨は「自分の住んでいる町のことでも意外と知らない歴史があり、またそれを少しでも知ってもらいたい。地域の歴史に興味を持ってもらい、また自由研究のひとつの課題としても使ってもらいたい」ということで、一昨年から始めた博物館事業の一つです。今年度は６月に下部小学校で、やはり４、６年生を対象に行ったものに続き２回目となります。



谷口館長からは、モノと伝承などを組み合わせながら歴史の捉え方などを話した上で、湯之奥金山の歴史から始まり、その他の山梨県の金山の姿や東日本全体としての金山の話、世界遺産運動の話にまで発展しました。谷口館長からの話を聞いた後、今度は児童たちが、総合学習の時間帯で個人個人で調べたことをグループごとにまとめ用意した質問を館長に投げかけましたが、質問内容も、金の価値について、金山衆は一日いくらもらっていたのか、金山衆の暮らしや食べ物がどんなものだったのか、下部温泉と金山衆の関係など多岐に及び、１時間以上の授業の間、質疑は絶えることなく、館長と児童たちの間で活発な質疑応答が交わされました。

菊の花だより

空気がすっかり冷たくなってくるこの季節に綺麗に咲く菊の花が、今年も博物館玄関前に飾られました。毎年この時期に依田良平さん（常葉在住）の手により丹精こめて作られたのは３種類。鮮やかな黄色の見事な菊の花が来館者の目を楽しませてくれました。この菊の前で記念写真を撮影するお客様の姿も多く見かけられました。

公開講座の意義

開館以来、毎年秋口から月一回のペースで約半年に渡り行っている博物館主催事業の目玉の一つ、公開講座も今年度で６年目となりました。

今でこそ浸透してきた金山史研究ですが、当館が開館した平成９年当時は、まだまだ新しいジャンルでした。湯之奥・黒川の総合学術調査により、両遺跡は甲斐金山遺跡として国史跡の指定を受け、さらにこの事が全国の金山史研究の高まりと、呼び水となったことは間違いありません。

鉱山のあり方、その歴史など、金山を広く捉え考える上でテーマを設定し、全国的に金山史研究の情報発信施設でありたいという当初からの意向に賛同してくださった先生方の御協力により公開講座が成り立ち、通算回数も33回を数えるまでになりました。

講演を担当される先生方は、テレビ・雑誌・学会誌など多くの場面でその名を連ねる全国的にもトップクラスの先生方です。当館には「学術的な研究拠点」でありたいという目標がありますが、こうした33回の公開講座と記念講演会などの蓄積は、館のそうした評価にもつながっ

てきました。

今年度32回目の公開講座を担当されました井澤英二先生（九州大学名誉教授）は、鉱床学を専門領域にした先生で、その名声は日本だけでなく世界にもその名をとどろかせています。

これらの講演はすべて、講演記録集『金山史研究』として刊行しており、一般的な読み物としてだけでなく各研究機関、研究者などの間でも広く活用されています。（現在、第１集～第４集まで刊行発売中）また、館の財産として蓄積され、その他の博物館事業にも大きく寄与しています。例えば毎年好評を博している子供金山探検隊プログラムも公開講座による子どもバージョン・プログラムの一つです。

博物館が学術文化施設として全国レベルを保ち続ける上でも重要なこれらの事業は今後も精力的に推進していきます。一般的に難しいと思われがちなテーマを難しくなりすぎないように配慮されお話しくださる先生方の話と、直接質疑応答を交わすことが出来る公開講座に多くの皆さんのご参加をお奨めいたします。

これまで開催されてきた（今後開催する）公開講座は以下のとおりです。
平成９年度から平成12年度公開講座までは講演記録集『金山史研究』として刊行しております。
平成13年度、14年度公開講座は『金山史研究第５集』として年内刊行予定です。

戦国の金山を語る－湯之奥から日本を考える－（平成９年度公開講座）

第１回	「武田氏と金山－その１」古文書から見た金山衆」	信州大学教授　笹本正治
第２回	「日本鉱山史上の湯之奥金山」	山梨学院大学教授　十菱駿武
第３回	「湯之奥金山と鉱山技術」	帝京大学文化財研究所研究部長　萩原三雄
第４回	「金山衆の暮らしと信仰」	富士吉田市教育委員会　堀内　真
第５回	「武田氏と金山－その２」	山梨県教育委員会　堀内　亨
第６回	「今後の金山研究と資料館」	湯之奥金山博物館館長　谷口一夫

菱刈金山と歴史の中の湯之奥金山－湯之奥金山を考える上で－（平成10年度公開講座）

第７回	「日本の金山の歴史と菱刈金山」	九州大学教授　井澤英二
第８回	「石見銀山遺跡の調査から」	島根県大田市教育委員会主任　遠藤浩巳
第９回	「黒川金山と日本の鉱山史」	東京大学教授　今村啓爾
第10回	「佐渡金山と佐渡奉行所」	新潟県相川町教育委員会主事　斎藤本恭

鉱山技術史的に見た湯之奥金山（平成11年度公開講座）

第11回	「鉱山技術史的に見た湯之奥金山遺跡～初期金山の仕法～」	金属鉱山研究会会長　村上安正
第12回	「佐渡相川金山にみる鉱山技術・水揚げ～民俗学的考察～」	佐渡相川郷土博物館学芸員　柳平則子
第13回	「古代中国・中世ヨーロッパの鉱山技術～文献考察と視角～」	金属鉱山研究会会長　村上安正
第14回	「兵庫県妙見山麓遺跡にみる精錬遺構と技術～考古学調査から～」	妙見山麓遺跡調査会調査主任　神埼　勝
第15回	「奥州と北海道の産金技術」	岩手県埋蔵文化財センター調査第二課長　高橋與右衛門

我が国の産金と金銀貨－湯之奥の産金と貨幣を考える－（平成12年度公開講座）

第16回	「近世:金貨の時代来たる」	白梅学園短期大学講師　西脇　康
第17回	「江戸時代の黄金・貨幣観」	早稲田大学教授　深谷克己
第18回	「甲州金から慶長小判へ」	兵庫県埋蔵銭調査会代表　永井久美男
第19回	「金銀銭貨の出土資料」	出土銭貨研究会事務局顧問　尾上　実
第20回	「生活の中の金銀貨～江戸時代の価値に迫る～」	千葉大学講師　加藤　貴

金山衆の産金技術を探る－粉成・比重選鉱・灰吹・色揚げの理論と実際－（平成13年度公開講座）

第21回	「湯之奥型、黒川型、リンズ式定形型」挽き臼の特質と実際	湯之奥金山博物館館長　谷口一夫
第22回	「比重選鉱の方法と理論と実際」	砂金掘りコーディネーター　斎藤勝幸
第23回	「灰吹き法の理論と実際」	和光金属技術研究所代表　伊藤博之
第24回	「色揚げ技術の理論と実際」	和光金属技術研究所代表　伊藤博之
第25回	「文献に表れた甲州金と現物貨幣」	早稲田大学・白梅学園短期大学非常勤講師　西脇　康

河内地方の諸金山－甲斐国・河内における金山史研究の歩み－（平成14年度公開講座）

第26回	「河内の諸金山①（早川町の諸金山）」	山梨県考古学協会名誉会長　野沢昌康
第27回	「河内の諸金山②（南部・身延・下部の諸金山）」	郷土史研究家　加藤為夫
第28回	「湯之奥金山と学校教育（学咬教育に取り入れられた湯之奥金山）」	元下部町教育長　二宮美仁
第29回	「穴山梅雪と金山（文献から見た穴山氏と金山）」	山梨県史編さん室　平山　優
第30回	「甲斐金山の展望（金山史研究の現状と将来）」	帝京大学文化財研究所所長　萩原三雄

甲斐金山と鉱床学－山金・砂金・芝金を見極めた金山衆の世界－（平成15年度公開講座）

第31回	「武田氏の山金鉱床」の－考察	鉱物同志会会員　原田　明
第32回	「戦国期金山衆の自然理解～日本の鉱床地質学の源流～」	九州大学名誉教授　井澤英二
第33回	「長尾（甲武信）金山雑考～鉱山と植物～」	雲南・チベット民浴学会会員　由井　格
第34回	「金鶏金山（長野県）の歴史と地質鉱床」	三井金属鉱業総合研究所資源研究室部長　五味　篤
第35回	「富士山あれこれ～鉱床学からちょっと離れて～」	県環境科学研究所自然環境研究部部長　輿水達司

誌上博物館　－シリーズ その20－　金はくすり？

「いつまでも若々しく」「年を取らなければいい」という思いを誰でも一度くらいは抱いたことがあるでしょう。世界の歴史を振り返ってみると、時の権力者が不老不死を望み、その悲願達成のために八方手を尽くすというような逸話が世界各地で多く残っています。

紀元前219年、秦の始皇帝の命令で不老不死の薬を求め、童男童女3,000人を従えた徐福が蓬莱島を目指し、山東省から船出したという話は不老不死薬にまつわる話として有名です。

日本でも聖武天皇が不老不死薬として鉱物薬を愛用したという話が伝えられています。

残念ながらそんな夢の薬の発見はありませんでしたが、こうした動きから動植鉱物を利用し天然の長寿薬材の採取加工などの薬効知識は「本草学」という成果を生みました。

中国最古の薬物書といわれる『神農本草経』（著者詳細不明、成立年代は西暦１世紀初頭頃？）には、365種の天然薬材が紹介され、またその中に含まれている鉱物は45種類あります。雲母、石英、滑石、亜鉛など、現在も薬として利用されているものもあれば、水銀、砒素といった毒性の強いものまで様々な鉱物名が記載されています。これらの中には金の名も掲載されています。

良く知られているように、金は非常に柔らかく、叩くと箔状に伸びる性質（＝展延性）はあらゆる金属の中でも最大、さらに錆びることも風化することもなく、紀元前３世紀頃にはその存在を知られ人々に利用されてきました。

その昔、人々にとって金そのものが宗教上や富の権力の象徴というもののみにとどまらなかったのは“破壊”や“消滅”のない「不変性」は限りなく神秘的で神聖であったと考えたからかもしれません。その思いは金を自らの手で作り出そうという「錬金術」を誕生させました。卑金属を貴金属に変える錬金術の研究が、結果として、宗教や哲学、科学技術的なものまでも発達させ、さらには人間を長く健康に保つ医術・医薬品を作ることに向けられ医学を発展させるという二次的な副産物をもたらしたのは周知の事実です。「薬としての金」という観念を定着させたのは、その輝きと不変という性質が不老不死を連想させたからなのかもしれません。

では、実際に金の薬理効果というのはいかほどなのでしょうか。

中国医学では紀元前から精神安定剤として、また骨髄を強固にし消化活動を活発にし五臓の働きを良くすると考えられてきました。中国の代表的な本草書で明（1368～1644）の時代、李自珍の手により大成された漢方を釈明した『本草綱目』には「一時、化合物を作って結核の薬として利用したが現在ではほとんど利用されない」とあります。ならば金は全く何の効能もないのかと言うとそうではありません。現在は、ある種の腫瘍の治療や画像診断などに使用されていますし、火傷などに効く軟膏などの外用薬としても使用されています。

金製剤では「リドーラ」、「シオゾール（注射）」といった、金の化合物が主成分の抗リウマチ薬があります。薬を使い続けると関節の炎症部位に金が蓄積され、それが免疫系に作用し腫れを鎮めるという効果があります。ただし多くの人に有効ではありますが、遅効性で効いてくるのに時間がかかります。飲み薬のほか注射薬もあり、注射薬としては癌の治療薬としても用いられていますが、注射による金療法は以前からよく行われている治療法です。

今ではワインや日本酒などに金箔が入った商品を店頭で良く見かけますが、金箔がキラキラと舞い上がる様子は、見る人をなんとも優雅でリッチな気分にさせてくれるようです。実際に金は化学的に不活性なので、こういう形で金そのものを口にするだけでは体内を通過するだけ、ということになり、薬理上は効果がないと言えますが、“病は気から”という言葉もあるようにもし「金を飲んだので体調が良くなった」ということがあるならば、それはそれで立派に薬としての金の役目を果たしていると考えることが出来ますね。

（学芸員：小松美鈴）

参考資料
岐阜県「内藤記念くすり博物館」提供

私の研究ノート⑭

資料紹介　　高岡伸五（湯之奥金山博物館友の会会長）

「栃代金山」発見の鉱山道具（下臼）

平成15年(2003)11月13日(木)、下部町教育委員会湯之奥金山博物館桐戸雅光係長は、下部町栃代在住の芝原治一氏、同松永真祐氏の案内で栃代金山跡地の確認調査を行った。金山跡は右図●印の地点で標高900～1,000mに位置します。

現地へは現在の栃代集落の西側に２本の沢が流れ、外側が平場沢、内側が無名の沢ですが、その無名の沢を登ること約１時間で到達します。

沢にはかつての「わさび」栽培の跡も残されていますが、現在は登る人もなく荒れ放題。所々の樹木には熊が皮を剥いた痕が見られます。精錬場跡といわれる所には、規模的には小さな石積みで区画されたテラスが確認できますが、沢添いからここに紹介する所の鉱山臼(下臼)１点が発見されました（写真)。

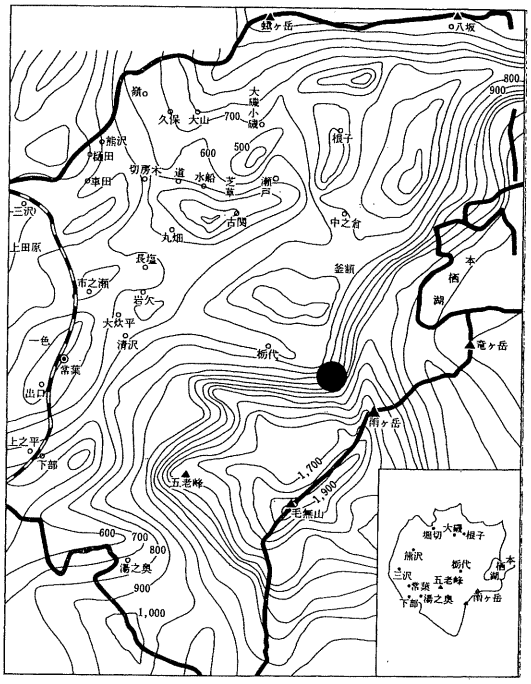
発見された下臼は、観察表（下臼の数値のみ記載）に見られるとおり残存率60%、直径は40.5cmで湯之奥金山から発見されている臼と比較しても一般的な普通のタイプ。

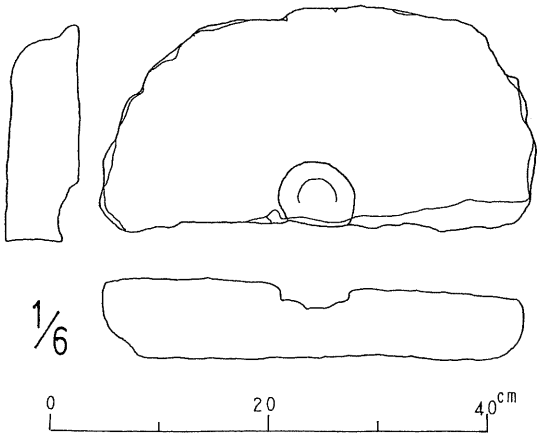
中央に軸穴が明けられていますが、リンズタイプの下臼。軸受穴から外側へ粉成時に付いた擦痕跡が内側に１～２mm、外側に0.5mm確認できます。

形状から見ると江戸中期に比定されます。本格的な調査によって全貌が明らかになることを期待しています。

栃代金山ひき臼（下臼）

観察表		整理番号 No.0002	
出土遺跡　栃代金山出土			
形式		残存率	60%
上臼	直径 cm	供給口	直径 cm
	厚さ cm		深さ cm
	重量 kg	柄溝数	長さ cm
軸受孔	直径 cm	柄穴数 無	幅 cm
深さ	cm		深さ cm
ものくばり		下臼	直径 40.5cm
片減り			厚さ 5.5～7.8cm
色・石質	緑火山礫擬灰岩		重量 10.9kg
		実測・トレス	高岡伸五





館からのお知らせ

平成15年度 公開講座日程

甲斐金山と鉱床学

～山金・砂金・芝金を見極めた金山衆の世界～

平成15年度公開講座も残すところあと２回となりました。以下のような日程となっておりますので多くの皆様の御聴講をお待ちしております。

回数	日時	演題	講師
34回	平成16年 1月17日(土)	「金鶏金山の歴史と地質鉱床」	三井金属鉱業総合研究所資源研究室 室長 五味 篤
35回	2月14日(土)	「富士山と甲府盆地」	県環境科学研究所自然環境研究部 部長 輿水達司

主　催　甲斐黄金村・湯之奥金山博物館、下部町教育委員会
会　場　湯之奥金山博物館多目的ホール（JR身延線下部温泉駅下車・徒歩３分）
時　間　午後２時～午後４時
受講料　無料
その他　気象条件や講師の都合により日程が変更される場合がありますのでその都度、博物館へお問い合わせのうえ、御来館ください。

特別展のお知らせ

町内に残る生活道具を集め、昭和の時代の身の回りにあった道具で生活空間を再現、紹介します。御来館の際には是非覗いて、少し前まで使っていた道具の懐かしさを思い出してみてください。

第６回特別展「少し昔のしもべの暮らし展」

期日：平成16年１月20日(火)～２月13日(金)
場所：湯之奥金山博物館多目的ホール　※観覧無料

親子映画観賞会

恒例となった親子映画観賞会ですが、10月25日(土)は「リロアンドスティッチ」、12月20日(土)は「ドラえもん～のび太の夢幻三剣士～」を上映しました。どちらも50人前後の参加者が集まり楽しんでくれました。次回、映画会は春休み、以下のような日程となりますので楽しみにしていてください。

期日：平成16年３月24日(水)午後１時から　　※上映作品など詳細は後日発表いたします。

編集後記

つい数日前まで正月休みだったのに、なんて嘆きながら仕事始めの日を迎えた人も多いのではないでしょうか。過ぎていくのはあっという間の楽しい時間。初詣、おせちにお雑煮、こたつにみかん・・・。お正月をたっぷり満喫して英気を養った後はしっかり気を引き締めて。仕事、勉強、そして休暇、これらをうまく両立してこの新たな一年を頑張っていきましょう。

博物館だより　第27号　平成16年１月15日
発行　〒409-2947 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
ＴＥＬ　0556（36）0015
ＦＡＸ　0556（36）0003
博物館ホームページアドレス http://www2.town.shimobe.yamanashi.jp/kinzan/　博物館Ｅメールアドレス kinzan@town.shimobe.yamanashi.jp